東京大学哲学研究室『論集』35号（2016年度）
pp.91-104

# デイヴィッド・アームストロングの様相の Truthmaker 理論について

吉田　佑介

本稿の目的は、デイヴィッド・アームストロングによる可能性原理（possibility principle）とそれに基づいた真なる可能性命題についての Truthmaker（以下、TM）理論を批判的に検討し、その中で、様相の形而上学における現実主義一般がかかえる問題を明らかにすることである。アームストロングは、昨今の現代形而上学における TM 理論をめぐる議論を牽引してきた、第一人者であった。しかし、こと様相的真理については、アームストロングの主張が、これまで真剣な考察の対象として扱われることは、多くはなかった。また、様相的真理の TM 理論一般についても、「全ての真理が TM をもつ」とする TM 全面主義が一定の支持を得ているにも関わらず、否定的真理や必然的真理と比較して、その研究が多くの TM 論者によって積極的に扱われているとは言い難い。以上の点に鑑みて、様相の TM 理論における一立場として、アームストロングの議論を取り上げ、中でも真なる可能性命題についての理論について考察することで、その問題点を浮き彫りにするとともに、そこから、様相の TM 理論における 1 つの問題として、現実主義一般がかかえる問題を引き出すことが本稿の最終目標となる。

本稿の構成は以下の通りである。1 節では、議論の前提として、アームストロングが TM 理論と様相の形而上学についてどのような立場をとるかを簡単に確認する。2 節では、アームストロングによる可能性原理とそれに基づいた真なる可能性命題についての TM 理論がどのようなものであるかを説明する。3 節では、アームストロングによる真なる可能性命題の説明がかかえる問題を指摘する。4 節では、アームストロングへの批判から見出だされる、現実主義一般が、真なる可能性命題に TM を与えようとする際にかかえる問題を明らかにする。

## １．導入

ここでは、本題に入る前に、以降の議論の見通しを立てるためにも、本稿の内容がどのような前提のもとで展開されるかを確認しておきたい。具体的には、ア

ームストロングが TM 理論一般と様相の形而上学について、どのような立場をとるのかを「TM 全面主義（truthmaker maximalism）」「TM 必然主義（truthmaker necessitarianism）」「事態（state of affairs）」「現実主義（actualism）」というキーワードを手がかりに、簡単に説明する。

本稿の内容は、現代的な分析形而上学における、Truthmaker（以下、TM）理論をめぐる問題を扱うものである。TM 理論とは、ある命題が真であるとき、その命題を真にする実在的根拠となる存在者（TM）が、個々の命題に対応する形で存在するという直観のもとで、その対応関係および関係項がどのようなものであるかという問題を扱うものである。特定の TM 理論の主張は一般に、① どのような真理が TM をもつのか、② TM 関係とはどのような関係か、③ TM とはどのような存在者かという 3 つの問いに答えることで具体化される。

それでは、本稿で中心的に扱うアームストロングの TM 理論がどのようなものであるかを、上で見た TM 理論についての 3 つの問いに沿って見ていこう。アームストロングは、「全ての真理は TM をもつ」とする TM 全面主義者である[1]。すなわち、アームストロングは、上記の問い①について、あらゆる偶然的真理、必然的真理、否定的真理や様相的真理が TM をもつと答えることになる。（以下では、山括弧は命題を表すものとし、＜□P＞が真であるような真なる命題＜P＞を「必然的真理」と呼び、必然性演算子のついた＜□P＞のような真理を「真なる必然性命題」と呼ぶ。「可能的／偶然的真理」、「真なる可能性／偶然性命題」についても同様である。一方で、一般的な用語法と、必然的真理でも可能的真理でもない真理が存在しないという事実に鑑み、真なる必然性命題と真なる可能性命題を合わせたものについては「様相的真理」と呼ぶ。）

また、アームストロングは「必然化（necessitation）」という概念によって TM 関係を特徴づける TM 必然主義者でもある[2]。TM 必然主義者によれば、ある存在者 T がある真理＜P＞の TM であるなら、T は＜P＞を必然化する[3]。ここで、T が＜P＞を必然化するとは、必然的に、T が存在するならば＜P＞が真であるということである。したがって、問い②については、アームストロングは、TM 関係とは、実在的対象と命題の間に成り立つ、カテゴリー横断的な（cross-categorial）必然化関係であると答えることになる。

問い③についてはどうであろうか。アームストロングは、一般に命題の TM となるのは「事態」であると主張する[4]。事態とは、ある普遍者とそれを例化する個体から構成される、両者とは区別された存在者である。例えば、ある青色のカエルがおり、したがって「そのカエルは青色である」という文によって表現され

る命題が真であるとしよう。アームストロングによれば、このとき、青さの普遍者とそれを例化する個体としてのカエルに加えて、それらによって構成される、そのカエルが青色であるという事態が存在する。そして、この事態が、当該の文によって表現される命題のTMになるというわけである。

最後に、アームストロングの様相の形而上学における立場を確認しておこう。というのも、本稿で扱うアームストロングの可能性原理は、様相的真理のTMを与えるためにもちだされた原理だからである。様相文や様相論理の可能世界意味論において言及される可能世界および可能的対象がどのような存在者であるかについては、大きく分けて2つの見解がある。1つは、可能主義（possibilism）と呼ばれる立場であり、可能世界および可能的対象が、現実世界とそこに住む我々と同様に、時空的な位置をもつ具体的な存在者として実在するとするものである。もうひとつの立場は、現実主義と呼ばれ、実在に含まれるのは、現実世界とそこに住む我々のみであり、可能世界および可能的対象は、現実的な対象から構成される抽象的対象にすぎないとするものである。アームストロングは、現実世界とは独立に存在する具体的存在者としての可能世界および可能的対象を拒否する、現実主義者である[5]。

本稿の以下の議論は、以上の4点を前提として展開される。したがって、それぞれの立場がその正当性について議論の余地のあるものであるが、これらの正当性についての議論には立ち入らないことにする。以上の点を踏まえて、次節からは、アームストロングの様相的真理についてのTM理論を見ていこう。

## ２．アームストロングの可能性原理とはどのようなものか

アームストロングによれば、真なる可能性命題にTM理論による説明を与える際に重要になるのは、「全くの可能性（mere possibility）」である[6]。全くの可能性とは、現実世界では偽であるが、可能的に真である命題のことである。一般に、形而上学的様相に対応するものとして受け入れられている様相論理のS5体系においては、ある世界で真である命題は、その可能性命題も当該の世界で真であることが保証される。したがって、＜P＞が現実に真である場合、＜P＞のTMが与えられれば、＜◇P＞のTMも与えられたことになると言えそうである[7]。だとすれば、真なる可能性命題のTMについて考察する際に、とりわけて注目されるべきは、全くの可能性であるということになるであろう。

全くの可能性についての可能性命題のTMを与えるために、アームストロング

は可能性原理（possibility principle）（以下、PP）という原理を導入する。PP の主張は、以下の通りである。

（PP）　存在者 T が命題＜P＞の TM であり、かつ、＜P＞が偶然的に真であるならば、T は＜◇¬P＞の TM である

すなわち、アームストロングによれば、ある偶然的真理＜P＞の TM が得られれば、同時に＜◇¬P＞の TM も得たことになるのである。また、ここで PP における＜P＞が否定的真理＜¬Q＞であるなら、＜◇Q＞の TM も得られる[8]。したがって、PP が正しいとすれば、ある世界で成り立つ全ての非様相的真理の TM が与えられれば、同時にその世界で真である全ての可能性命題の TM も得られることになる。

それでは、アームストロングによる、PP を正当化するための議論の詳細を見ていこう。PP を正当化するために、アームストロングは「含意の原理（entailment principle）」（以下、EP）という PP とは別の原理を導入する。EP の内容は以下の通りである。

（EP）　存在者 T が命題＜P＞を真にし、かつ、＜P→*Q＞であるならば、T は命題＜Q＞を真にする

すなわち、存在者 T が命題＜P＞の TM であるなら、T は＜P＞が含意する命題の TM でもある。なお、アームストロングによれば、（EP）において条件文が「→*」によって表されているのは、これが必ずしも古典的な条件文ではないことを強調するためである[9]。これが古典的な条件文として解釈されると、EP は、必然的真理について問題をかかえることになる。すなわち、上記の＜Q＞に必然的に真である命題を代入すれば、全ての偶然的真理の TM が、全ての必然的真理の TM でもあることが見て取れるであろう。これを受けて「→*」をどのように解釈するかについて、アームストロングは具体的な提案をしていないが、以下では、そのような適切な解釈が与えられたものとして議論を進めよう[10]。

アームストロングによれば、上記の EP を前提とし、以下の（P3）を受け入れるならば、次のように PP を支持する論証を与えることができる[11]。

（P1）　存在者 T は命題＜P＞の TM である（仮定）

（P2）　＜P＞は偶然的に真である（＜◇P∧◇¬P＞）（仮定）

（P3）　（（存在者 T は命題＜P＞の TM である）∧（命題＜P＞は偶然的に真である））→*（T は＜P＞についての偶然性命題＜◇P∧◇¬P＞の TM である）（前提）

（P4）　存在者 T は命題＜◇P∧◇¬P＞の TM である（（P1）～（P3）より）

（P5）　（＜P＞は偶然的に真である）→* ◇¬P（（P2）と命題の偶然性の性質から）

（P6）　T は＜◇¬P＞の TM である（（P4）と（P5）と EP から）

一見してこの論証は妥当である。また、（P1）、（P2）は仮定であり、（P5）は論理的真理である。そして、（P4）は、（P1）、（P2）を仮定したときに（P3）が正しければその真理性が論理的に保証される。したがって、この論証が健全であるかどうかは、（P3）が正しいかどうかにかかっていると言えよう。

（P3）を正当化するために、アームストロングは以下の議論を提示している。

> その本性から偶然的であるようなある存在者について考えてみよう。それは存在していなかったかもしれない。ところで、我々は以下のような主張をこれに加えることはできないだろうか。すなわち、その偶然的存在者の存在あるいは非存在は、他のいかなる存在者の存在あるいは非存在にも論理的に依存していないと。（だとすれば）以下のような反実仮想が成り立つ。すなわち、その存在者はいかなる同伴者もなしに存在していたかもしれない。そして、もしそうであれば、その存在の偶然性の TM は T それ自身であってはならないだろうか。したがって、もし T がある偶然的真理 P の TM であるなら 、それは＜P は偶然的である＞の TM でもあるのである。（Armstrong 2007, 103）

ここで、アームストロングが、必然的な存在者の存在を前提としていないことに注意されたい。この点を踏まえた上で、アームストロングは、ある 1 つの偶然的な存在者（E とする）のみが存在する世界を考える。このような世界の存在は、必然的な存在者の存在を予め拒否した上では、可能であろう。ここで、E は E の存在を主張する命題の TM である。ところで、E は偶然的存在者であるので、この世界においても E の存在についての偶然性命題は真である。ここで、この世界に存在するのは唯一 E のみであるので、この偶然性命題の TM たることができるのもまた、唯一 E のみであろう。したがって、この世界において E は E の存

在についての偶然性命題の TM でもある。同様の考察から、一般に、「ある存在者がある偶然的真理の TM であるなら、その存在者は、同時にその真理についての偶然性命題の TM でもある」（P3）という結論が導かれる。以上の議論が正しいとすれば、（P1）～（P6）の論証は健全であるということになるであろう。

## ３．可能性原理の問題点

### ３．１　不適切な一般化

以下では、アームストロングの可能性原理についての議論への反論を提示するわけであるが、先にも述べたように修正版の論証の正当性は前提（P3）の正しさにかかっている。したがって、私の反論はアームストロングによる（P3）のための議論に向けられることになる。

さて、第一に考えられるアームストロングの議論の問題点は、それが不適切な一般化を含んでいるというところにある[12]。先の引用文でアームストロングは、1 つの偶然的存在者のみが存在する世界についての思考実験から、偶然的存在者 T が＜T は存在する＞の TM であるなら、T は＜T が存在することは偶然的である＞の TM でもあるということを引き出した。そこでポイントとなったのは、この世界で当該の命題の TM たりうる存在者が T 以外に存在しないということであった。そして、さらにここから、もし T が偶然的真理＜P＞の TM であるなら、T は＜P＞についての偶然性命題＜◇P∧◇¬P＞の TM でもあるという一般的結論へといたる。

だが、この最後の一般化は、全く自明でないように思われる。たしかに、「その本性から偶然的であるような存在者の存在」という仮定を受け入れるなら、この存在者が単独でその存在の偶然性命題の TM であると主張することは可能であるかもしれない。だが、このことは、偶然的真理一般について、ある存在者がある偶然的真理の TM であるなら、それはその命題の偶然性の TM でもあるということを含意しない。すなわち、アームストロングの議論は、もし正しいとしても偶然的な存在命題についてあてはまるのみであり、（P3）の正当性を十分に保証できているとは言えないのである。

しかし、アームストロングには以下のように反論する余地が残されているかもしれない。先にもふれたが、アームストロングは、真なる命題の TM として、事態という存在者の存在を受け入れる。ここで、事態がそれ自体では部分を含まないような非構造的で原子的な存在者であるとしよう[13]。このような主張が可能だ

とすれば、ある1つの原子的で偶然的な存在者としての事態のみを含む世界を考えることができる。このような世界は、全ての原子的で偶然的な存在者としての事態について考えることができる。そのそれぞれについて、上記と同様の議論を提示することができるであろう。すなわち、ある1つの原子的で偶然的な事態Sのみを含む世界において、Sは<Sは存在する>以外に、Sに対応するような偶然的命題<P>を真にするとしよう[14]。このとき、この世界では、<P>についての偶然性命題<◇P∧◇¬P>も真である。ここで、<◇P∧◇¬P>のTMはどのような存在者であろうか。Sであろう。なぜなら、この世界で<◇P∧◇¬P>のTMたりうる存在者はSのみだからである。同様の考察は、他の全ての原子的で偶然的な事態についても行うことができる。したがって、先の一般化はやはり正当である。すなわち、ある存在者がある偶然的真理<P>のTMであるなら、それは<◇P∧◇¬P>のTMでもある。

（P3）を擁護するために導入された原子的事態の存在の正当性については、ここでは踏み込まないことにする。代わりに、ここで問題となっているアームストロングの議論が正しいとすると、彼にとって、より不都合な帰結を招くかもしれないということを次項で確認しよう。

### ３．２　TM関係のトリヴィアル化と理論の矛盾

その問題とは、（P3）についてのアームストロングの議論が正しく、また前項でふれた問題も解決可能であるとすると、任意の存在者が任意の真理のTMであるという帰結まで得られてしまうというものである。アームストロングが当該の議論において導いた結論は、ある存在者Tがある偶然的命題<P>のTMであるなら、Tは<◇P∧◇¬P>のTMでもあるということであった。しかし、この主張がTのみが存在する世界についての考察によって正当化されるものなのだとすると、T、<P>、<◇P∧◇¬P>をそれぞれ任意のU、<Q>、<R>で置き換えても同様の結論を得ることができる。このことを正当化する議論は以下の通りである。Uのみが存在する世界で、Uは<Q>を真にするとしよう。このとき、この世界で真である別の命題<R>を考えてみよう。この命題のTMは何であろうか。当然、Uであろう。この世界にはUしか存在しないのだから。ここではもはや、<Q>、<R>が偶然的である必要すらない。したがって、アームストロングの議論が正しいとすれば、（P3）はさらなる一般化によって、任意の真理<Q>と<R>についての「（存在者Tは<Q>のTMである）→*（Tは<R>のTMである）」（（P3’）と呼ぶ）という主張へと拡張できることになる。

この主張は、アームストロングが当該の議論によって示そうとした偶然性命題とその TM の間の関係のみならず、全ての真理とその TM との関係をトリヴィアルなものにすることにほかならない。このようにしてトリヴィアル化された主張は、全ての真理に適切な（relevant）形で TM を与えるという、アームストロングの TM 理論一般における試みの放棄を意味するであろう[15]。

さらによくないのは、上記の帰結が、アームストロング自身の TM 理論の矛盾をも導くということである。1 節でも見たように、アームストロングは TM 必然主義を採用する。だとすれば、ある存在者 T がある命題＜P＞の TM であるなら、T が存在する全ての世界で＜P＞が真でなければならない。ここで、2 つの偶然的存在者 a と b について考えてみよう。これまでに見たように、a は a のみが存在する世界で否定命題＜b は存在しない＞を真にする。したがって、TM 必然主義より、a が存在する全ての世界で＜b は存在しない＞は真である。ということは、b が存在する世界においても、a が存在すれば＜b は存在しない＞が真であるということになる。これはあからさまな矛盾である。以上より、アームストロングの議論が正しいとすれば、偶然的存在者が 2 つ以上存在する全ての世界が不可能な世界だということになる。これが世界の矛盾したあり方ではなく、アームストロングの TM 理論の矛盾を示すものであるということは、明らかである。

### ３．３　恣意的な仮定と可能性原理の実質

前項で指摘された問題は、TM 関係をトリヴィアルなものにするだけではない。アームストロングの議論から導かれる（P3’）は、それによって正当化される PP の内実をも否定してしまうものである。

前項でも見たように、2 節で引用されたアームストロングの議論とそこから導かれる（P3’）を受け入れると、任意の真理＜R＞について、T がその TM であるために、T が別の特定の真理の TM である必要はなくなる。このことは、（P1）～（P6）における T と＜P＞について言えば、T が＜◇P∧◇¬P＞の TM であるために、T が他でもない＜P＞の TM である必要はないということである。言い換えれば、＜P＞の TM である T と＜◇P∧◇¬P＞の関係が、T と他の全ての真理との間に成り立つ TM 関係（と呼ばれるトリヴィアルな関係）の 1 つにすぎないということになる。これは、T と＜◇P∧◇¬P＞の関係が TM 理論の観点から見て、特別なものではないということを意味する。だとすれば、とりわけ（P1）と（P2）は、TM 関係という観点からは区別されない可能性から選ばれた恣意的な仮定であると言わざるをえない。

そして、このことは、アームストロングにとって、より不都合な結果を導くと思われる。（P3’）において、＜Q＞が偶然的真理であるなら、任意の真理＜R＞は＜◇¬Q＞で置き換えることができる。これによって得られる「（＜Q＞が偶然的に真であり、かつ、）存在者 T が＜Q＞の TM であるならば、T は＜◇¬Q＞の TM である」という主張は、まさに PP そのものである。すなわち、2 節で引用された議論が正しいとすると、同様の議論から、（P1）～（P6）を経ずに、ダイレクトに PP を得ることができるのである。だとすると、前段落と同様の議論から、上記の主張における T と＜◇¬Q＞の関係は、任意の存在者と真理の間でトリヴィアルに成り立つ TM 関係の 1 つにすぎないという帰結が得られる。このことは、他でもない可能的真理とその TM の間にのみ成り立つ原理として提示された PP の内容の実質性を否定するものであろう。アームストロングの議論は、それによって可能性原理を擁護しようとするものであるにも関わらず、それが正しいとすると可能性原理そのものの内実を否定してしまうようなものなのである。

### ３．４　そもそもアームストロングの議論は可能であったか

これまでの論点と関連して、1 つの偶然的存在者のみが存在する世界についての考察が、アームストロング自身の TM 理論と相容れないものであるか、そうでなければ、そもそも無意味であるという点を指摘しておきたい。この問題は、否定的真理の TM に関わるものである。上記のような 1 つの偶然的存在者のみが存在する世界の考察から導かれる帰結は、否定的真理についても適用可能である。一般に、我々の考察の対象となる可能世界には、いかなる命題＜P＞についても＜P＞か＜¬P＞のいずれかが真であるという条件が課される。すなわち、アームストロングの議論における件の世界においても当然、多くの否定命題が真であることになる[16]。これらの否定的真理の TM はどのような存在者であろうか。これまでに見たように、アームストロングの議論が正しいとすれば、それは当然、この世界に唯一存在する偶然的存在者 T であろう。

しかし、だとすれば、このようにして与えられる否定的真理の TM は、アームストロングによる否定的真理の TM についての理論の反例になるものである。アームストロングは、否定的真理の TM として、「総体としての事態（totality state of affairs）」という存在者の存在を認める[17]。総体としての事態とは、ある世界で成り立つ全ての事態についての、その世界にそれ以上の事態はないという 2 階の事態である。アームストロングによれば、全ての否定的真理の TM はこの総体としての事態によって与えられる。しかし、そうだとすると、偶然的存在者 T のみ

が存在する世界で、T がある否定的真理＜¬P＞の TM であるという先の帰結は、総体としての事態をもちださずとも否定的真理の TM が与えられる事例であるから、アームストロングの総体としての事態による説明の反例となるであろう。

したがって、アームストロングは＜¬P＞の TM を与えるために、T とは別に総体としての事態をもちださなければならない。しかし、このことは 3.2 項における思考実験がそもそも無意味であることを示すことになる。否定的真理の TM を与えるために、常に、その世界に存在する存在者に加えて、総体としての事態が要請される限り、ただ 1 つの存在者のみが存在する可能世界は原理的に存在しない。したがって、この場合、アームストロングの思考実験自体が無意味であるということになる。すなわち、3.2 項で引用された思考実験は、それ自体がアームストロングの TM 理論にある種のジレンマを呼び込むものなのである。

## ４．様相的真理の TM と現実主義的 TM 理論一般の問題

以上の内容は、アームストロングによる様相の TM 理論を拒否する理由を十分に与えるものであると思われる。しかし、そこから明らかになることは、PP が、そのままでは擁護不可能なものであるということにとどまらない。とりわけ、3.2 項で見た、TM 関係のトリヴィアル化の背景には、アームストロングが現実主義的な直観を論点先取的に受け入れているという問題点がある。そして、この問題点は、そのまま他の現実主義的 TM 理論の問題点として一般化できるように思われる。最後にこの点について確認しておきたい。

アームストロングが 2 節で引用された議論において、（P3）を正当化するためにもちだしたのは、T のみが存在する世界についての考察であった。すなわち、この世界で＜◇P∧◇¬P＞を真にしうるのは T のみであるという点から、その TM は T であるという結論が導かれたのであった。しかし、ここには現実主義的な直観に親和的な自明でない前提が隠れていると思われる。それは、「ある世界で真である命題の TM は、その世界に存在していなければならない」というものである。具体的な可能世界と可能的対象の実在を認めない現実主義者からすれば、例えば現実世界で成り立つ偶然性命題の TM を、現実世界外の可能的対象に求めることはできないであろう。したがって、現実主義者であるアームストロングがこのような前提を置くのももっともである。また、実際に、T のみが存在する世界についての考察から、直ちに先の結論を引き出すためには、上記の前提が先に受け入れられていなければならない。

だが一方で、このような前提は、むしろ現実主義的な存在論でのみ様相的真理の説明を与えることができることを示すという、ここでのアームストロングの目的が達成されたときに初めて、受け入れられるべきものである。したがって、上記の主張は、特段の議論が添えられないまま前提とされるのであれば、全くのドグマであると言わざるをえない。

以上の点は、見方を変えれば、アームストロングの議論が、現実主義による様相の TM 理論一般について、それが問題をかかえたものであるということを帰謬法的に示しているとも考えることができる。3.2 項で見た TM 関係のトリヴィアル化は、前段落で見た様相的真理の TM についての現実主義的直観によって導かれたものであった。だとすれば、このことは、誤った結論を導く現実主義が問題含みであるということを示しているのではないだろうか。実際に、この問題は、どのような現実主義的立場を採用するかに関わらず、現実世界外の存在者を拒否した時点で生じるものである。

例えば、現実主義的な様相の TM 理論の代表例として、様相の傾向性主義（modal dispositionalism）について考えてみよう[18]。傾向性主義者の基本的な主張は、「種々の可能性は全て現実の対象がもつ傾向性によって基礎づけられている」というものである。すなわち、ある現実に存在する個体のもつ傾向性 D がある事態 S をその顕現としてもつとき、D が例化されるという事態は＜S が成立する（存在する）ことは可能である＞を真にすると言える。例えば、あるグラスが壊れやすいという傾向性をもち、この傾向性が「床におとしたら割れる」という仕方で特徴づけられるとしよう。このとき、このグラスが「床におとしたら割れる」という傾向性を例化しているという事態は、このグラスが割れるという事態を可能にしていると考えられる。このようにして、傾向性主義による真なる可能性命題の説明は、一般に、以下のように与えられる。

（MD）[19]　事態 S の成立が可能であるのは、S を顕現としてもつ傾向性 D が現実において例化されているとき、かつそのときのみである[20]

そして、この説明を様相的真理の TM についてのものとしてとらえ直せば、（MD）は以下のように書き直すことができる。

（PTM）[21]　ある可能性命題＜◇P＞が真であるのは、ある傾向性 D が存在し、D が＜P＞を真にする事態 S を顕現としてもち、なおかつ、D が現

実において例化されているとき、かつそのときのみである[22]

さて、傾向性主義のもとで、先のアームストロングの議論を再考してみよう。ある世界があり、そこには、ある傾向性 D をある個体が例化するという事態 S のみが存在するとする[23]。このとき、傾向性主義によれば、この傾向性の顕現となる事態 M が真にする命題＜P＞は、この世界で成り立つ可能的真理である。すなわち、この世界において、S は＜◇P＞を真にする。ここまではよい。だが、この世界の別の真なる可能性命題＜◇Q＞についてはどうだろうか。ここで、＜Q＞は事態 S のいかなる顕現によっても真にされない命題であるとする。このとき、＜◇Q＞を真にしているのは、どのような存在者であろうか。2 節で引いたアームストロングの議論が正しいとすれば、傾向性主義が現実主義であることに鑑みて、それは S である。そして、3.2 項でも見たが、同様の議論は、その世界で成り立つ全ての真理について立てることができる。すなわち、同様の議論から、傾向性主義のもとでも、T のみが存在する世界では、その世界で成り立つ全ての真理の TM が T であるという結論（TM 関係のトリヴィアル化）が導かれてしまうのである。このことは、現実主義である傾向性主義が様相の TM 理論として不適切なものであるということを示しているのではないだろうか。

以上の問題は、全ての現実主義が共有する前提に起因するため、いかなる現実主義的立場においても生じるものである。すなわち、現実主義が正しいとすれば、我々は、ある世界における様相的真理の TM をその世界外に求めることはできない。しかし、そうだとすると、1 つの存在者のみが存在する世界においては、そこで成り立つ全ての真理の TM が、その唯一の存在者であるという結論が導かれてしまう。この結論は、TM 理論による真理の説明をトリヴィアルなものとしてしまうため、これを導く現実主義は、以上の議論が正しいとすれば、誤りである。

## ５．おわりに

本稿では、アームストロングによる、可能性原理に基づいた真なる可能性命題についての説明を批判的に検討した。そして、それを手がかりに、現実主義的な様相の TM 理論一般がかかえる問題を明らかにしたのであった。もちろん、本稿で導かれた結論は、現実主義が誤りであることを決定的に示すものではない。実際、本稿の結論が正しいものであることを示すためには、少なくとも、TM 理論自体が健全な哲学的営みであること、および、様相的真理や否定的真理の TM が

要請されるべきであることを示さなければならない。しかし、昨今の分析形而上学の議論において、TM 理論が一定の地位を確立していること、少なからぬ TM 論者が TM 全面主義を支持していることに鑑みれば、本稿の内容は、そこで明らかにされた問題が、現実主義者が真剣に考えるべきものであるということを十分に示せたのではないだろうか。

---

[1] Armstrong（2004, 5）などを参照。
[2] Armstrong（2004, 5-6）を参照。
[3] T が＜P＞を必然化することが、T が＜P＞の TM であることの必要条件であるという主張については、TM 必然主義者の間で広く受け入れられているが、十分条件であるという主張については、議論の余地がある。本稿においては、この点は重要ではない。この点についての議論としては、例えば、Armstrong（2004, 6-7）, Cameron（2008, 263-4）, Merricks（2007, 5-6）, Restall（1996, 332）, 秋葉 （2014, 56-61）などを参照。また、注 10 も参照。
[4] 例えば、Armstrong （1997）などを参照。
[5] アームストロングによる様相の形而上学に関する文献としては Armstrong （1989）などを参照。
[6] Armstrong （2003, 13; 2004, 83）を参照。なお、先にも述べた通り、本稿の以下の部分では、アームストロングによる様相の TM 理論の中でも、可能性原理とそれに基づいた真なる可能性命題への説明のみを扱う。本稿における可能性原理への批判で、十分にアームストロングによる様相の TM 理論のもっともらしさを否定できると思われること、可能性原理への批判のみから 4 節で見る現実主義的 TM 理論一般についての重要な帰結が引き出せることから、紙幅の制限も考慮し、本稿では真なる必然性命題についての理論は扱わないことにする。アームストロングによる真なる必然性命題への説明としては、Armstrong （2004, 95-111）を参照。
[7] 実は、これを主張するためには、下で紹介する「含意の原理」を前提としなければならない。
[8] アームストロングは TM 全面主義者なので、否定的真理にも TM を与えるということに注意。
[9] Armstrong（2004, 10-2）を参照。
[10] なお、（EP）における「→*」の解釈の一例としては、Restall（1996）を参照。また、以上の点と類比的な理由から、必然化による TM 関係の定義が必然的真理と相容れないこともしばしば指摘される。例えば Cameron（2008, 263-4）, Lewis（2001, 604）, Smith（1999, 274）などを参照。
[11] なお、以下の定式化は、Armstrong（2003; 2004, 83-94）で提示された定式化に、Armstrong（2007）で提示された修正を反映させた、私によるものである。これには、アームストロングが、前二論文で提示した自身の論証の前提を後に撤回し、（P3）を新たな前提として加えたという背景がある。修正前の論証に関する文献としては、上記の他に Alward（2004）, Bostock（2005）, Keller（2007）, Pawl（2010）などを参照。
[12] 以下の論点は、Pawl（2010）でも指摘されている。
[13] 原子的存在者としての事態に関する議論としては、秋葉（2014, 252-60）が詳しい。
[14] 例えば、S が（ある特定の）リンゴが赤いという原子的で偶然的な存在者としての事態であるような場合を考えてみよう。このとき、S は＜S は存在する＞に加えて＜（ある特定の）リンゴは赤い＞という偶然的命題をも真にするであろう。
[15] ここでの適切さは、当然「トリヴィアルではない」という意味も含むであろう。例えば、Armstrong（2004, 11）などを参照。また、同書 p. 85 においては、可能性原理によって全くの可能性に適切な TM を与えられると述べている。
[16] 例えば、この世界には存在しない対象 U についての存在命題＜U は存在する＞はこの世界で偽であるから、その否定命題＜U は存在しない＞はこの世界で真である。
[17] アームストロングによる否定的真理の TM 理論としては、Armstrong（2004, 53-67）を参照。
[18] 様相の傾向性主義のより詳細な説明としては、Borghini and Williams（2008, 26）, Jacobs（2010, 236）, Pruss（2002, 329）などを参照。

[19] ‘Modal Dispositionalism’の略。
[20] このような定式化は、Borghini and Williams（2008, 31）に見られる。また、Vetter（Forthcoming, 14）でも、傾向性より広い概念である潜在性（potentiality）を用いて、同様の定式化がなされている。なお、多くの場合、傾向性主義者は、現実には例化されていないが、その顕現が可能である傾向性を扱うために、傾向性の連鎖を考慮に入れた、（MD）よりも複雑な説明を与える。しかし、本稿の議論においては、この点は重要ではないため、その点は扱わないことにする。
[21] ‘Possibility’および‘Truthmaker’より文字をとった。
[22] ここで、（MD）の左辺「事態 S の成立が可能である」が（PTM）において「ある可能性命題＜◇P＞は真である」となっているのは、ここで考えられている TM 関係が事態と他の存在者との関係ではなく、命題と他の存在者との関係だからである。
[23] この想定について、ある事態が存在する時点で、その構成要素である普遍者と個体の存在を要請せざるをえないという反論が考えられる。しかし、先にも述べたように、事態が構成要素をもたない原子的な存在者であると考えることは不可能ではない。

［参考文献］

Alward, Peter. 2004. “Review of David Armstrong’s Truth and Truthmakers,” *Disputatio*, 17, 74-8.
Armstrong, David M. 1989. *A Combinatorial Theory of Possibility*, Cambridge University Press.
——— 1997. *A World of States of Affairs*, Cambridge University Press.
——— 2003. “Truthmakers for Modal Truths,” in *Real Metaphysics*, Hallvard Lillehammer & Gonzalo Rodriguez-Pereyra (eds.), Routledge, 12-24.
——— 2004. *Truth and Truthmakers*, Cambridge University Press.
——— 2007. “Truthmakers for Negative Truths, and for Truths of Mere Possibility,” in *Metaphysics and Truthmakers*, Jean-M. Monnoyer (ed.), Ontos Verlag, 99-104.
Borghini, Andrea. and Williams, Neil E. 2008. “A Dispositional Theory of Modality,” *Dialectica*, 62, 21-41.
Bostock, Simon. 2005. “Review of David Armstrong’s Truth and Truthmakers,” *Philosophical Books*, 46, 369-70.
Cameron, Ross P. 2008. “Truthmakers and Modality,” *Synthese*, 164, 261-80.
Jacobs, Jonathan. 2010. “A Powers Theory of Modality: or, How I Learned to Stop Worrying and Reject Possible Worlds,” *Philosophical Studies*, 151, 227-48.
Keller, Philipp. 2007. “A World of Truthmakers,” in *Metaphysics and Truthmakers*, Jean-M. Monnoyer (ed.), Ontos Verlag, 105-56.
Lewis, David. 2001. “Truthmaking and difference-making,” *Noûs*, 35, 602-15.
Merricks, Trenton. 2007. *Truth and Ontology*, Oxford University Press.
Monnoyer, Jean-M. (ed.). 2007. *Metaphysics and Truthmakers*, Ontos Verlag.
Pawl, Timothy. 2010. “The Possibility Principle and the Truthmakers for Modal Truths,” *Australasian Journal of Philosophy*, 88, 417-28.
Pruss, Alexander R. [2002] 2008. “The Actual and the Possible,” in *The Blackwell Guide to Metaphysics*, Richard M. Gale (ed.), Blackwell Publishers, 313-33.
Restall, Greg. [1996] 2009. “Truthmakers, entailment and necessity,” *Australasian Journal of Philosophy*, 74, 331-40; in *Truth and Truth-Making*, Edward J. Lowe and Adolf. Rami (eds.), McGill-Queen’s University Press, 87-97.
Smith, Barry. 1999. “Truthmaker Realism,” *Australasian Journal of Philosophy*, 77, 274-91.
Vetter, Barbara. Forthcoming. “Potentiality to Possibility,” in *Handbook of Potentiality*, Kristina Engelhard and Michael Quante (eds.), Springer.
秋葉剛史. 2014.『真理から存在へ〈真にするもの〉の形而上学』, 春秋社.